

## 母と私と教科書と

岐阜県 垂井町立不破中学校 2年  
桐山 いおり

「大切に使わないとね。」

私が初めて教科書を貰って、家に持ち帰った入学式の夜、一つ一つに丁寧な字で私の名前を書きながら母が言った。真新しい私だけの教科書。今までに買って貰ったどの本とも違う特別な存在。私は少しお姉さんになったような心地良さを感じて、教科書をギッと抱きしめて眠りについたことを覚えている。

それから毎年、母は私の進級を祝うように、一つ一つに丁寧な字で私の名前を書いてくれた。そして、教科書の裏表紙に書かれた、「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」という言葉が指差して、私に声に出して読むように言った。税金の意味さえ、まだ理解できていなかった私に、どうして母は読ませたのか。今なら、母の思いが分かるような気がする。なぜなら、あの時、確かに私には感謝の気持ちと責任感が芽生えていたのだから。

それから、母は教科書を手にとると、一冊ずつページをめくっては、楽しそうに微笑んでいた。その姿が羨ましくて、

「何が書いてあるの？ 何が楽しいの？」

と何度も聞く私を母は膝に乗せ、

「ママね、音読は余り得意じゃなかったの。それなのに、選りに選って参観日の授業でこのお話の音読が当たっちゃってね、思い出したら、何だかドキドキしてきちゃった。」

であったり、  
「この問題、初めて授業でやったときには、全く歯が立たなかったんだけどね、『絶対に解いてやる！』と思って何度も何度も挑戦していたら、いつの間にかスラスラ解けるようになっていて、自分でも驚いちゃった。」

であったりと、教科書に詰まった思い出を話してくれた。その話を聞いているだけで、その時々母のドキドキやワクワクが伝わってきて楽しかったし、何より、母がどのような子ども時代を過ごしたのかを垣間見ることができたことが嬉しかった。また、その話の中で、母の失敗談を聞くことができたお陰で、私は失敗を恐れることなく、年々難かしくなる勉強に対しても意欲的に取り組むことができるようになったのだと思う。

中学校に入学した年には、母の方から私に、

「いおりは、今までに教科書にでてきたお話の中で、どのお話が一番好き？ どのお話が一番印象に残ってる？」

と聞いてきたので、私は、すかさず、

『『白いぼうし』！』

と答えた。その瞬間、忘れていた筈の冒頭の一文がスッと頭に浮かんだので、恐る恐る、

「これは、レモンのおいですか。」

と口に出してみると、待っていたかのように、

「いいえ、夏みかんですよ。」

と母が続けてくれた。私の記憶と母の記憶が繋って物語が動き出したとき、レモンのような夏みかんのような甘酸っぱい香りに包まれて、とても懐かしい温かい気持ちになった。

今度は、私が母に同じ質問をしてみると、

「ママは、『サーカスのライオン』かな。」

と答えた。私の中では、母だったら、多分、『ごんぎつね』か『スーホの白い馬』と答えるだろうと、勝手に思い込んで次に話す言葉まで用意していたから余計に、母の口から知らない題名を聞かされたときに悲しい気持ちになってしまったのだと思う。落ち込んだ私を見た母が、『サーカスのライオン』を話して聞かせてくれた。主人公のライオンが炎の中に飛び込んで、少年を救い出す場面に差し掛かる頃には、母の目からも私の目からも、大粒の涙が溢れていた。

母が話し終わると、私は、居ても立ってもいられなくなって、これまでの教科書を引っ張り出してきた。母との約束を守って、大切に使ってきた私だけの教科書。一冊ずつ手に取って中を開いてみると、あの日、あの時の思い出がたくさん詰まっていた。『白いぼうし』だけではない。幾つものお話が、今でも私の中に鮮明な記憶となって残っていたのだ。

教科書に見入っている私に母が言った。

「教科書には、その学年の読解力や情緒力に合わせたお話が載っているから、読む人は、作者や主人公の心に寄り添い、自分のことのように感じるができるんだね。だから、いつまでも心に響いて、記憶に深く刻まれていくんだね。」

と……。

私にとっての教科書、それはいつも身近にあって、知りたいという好奇心を引き出してくれた掛け替えのない存在。そして、母と子が思い出を共有し、絆を深めるきっかけを作ってくれた有り難い存在。

私も、いつか母親になる 때가来るだろうか。その時は、母が私にしてくれたように、教科書の素晴らしさを子どもに伝えてあげたい――。